

コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との 関係の再検討

— リーダーシップPM論からのアプローチ —

伊 藤 豊 彦*

Toyohiko Iro

Reconsideration of the Relationships between
Coaches' Leadership Behavior and Social Power
— A Study based on PM Theory of Leadership —

問 題

スポーツの指導者（以下、コーチと呼ぶ）が、選手やチームの競技力向上のためにどのような指導を行うかは、競技成績を規定する重要な要因の1つである。しかしながら、コーチの指導が常にコーチの意図する方向で効果があるとは限らないことから、どのような指導を行えば、選手の行動をコーチの望むように効果的に変化させることができるかという問題は、スポーツの指導において重要な問題の1つであると考えられる。

さて、コーチが選手に何らかの指導を行い、選手がその指導に対して何らかの反応をするというスポーツ指導の一連の過程は、社会的影響の現象の1つとしてとらえることが可能である。一般に社会的影響とは、ある人が他者に影響を与えることをいうが、この場合、コーチが選手に影響を及ぼすことができるのは、コーチに何らかの社会的勢力（social power）が備わっているからだと解釈される。

ところで、このような他者への影響の試みを可能にする社会的勢力は、その基盤（base）あるいは属性の違いによっていくつかの異なる種類に分類される。たとえば、森・伊藤・豊田・遠藤（1990）は、スポーツ指導場面に限定してコーチの有する社会的勢力の基盤を因子分析によって検討し、「専門・参照性」、「罰の脅威」、「利益への期待」、「指導意欲」、「正当性」、「親近・受容性」の6つに分類した。まず第1に、「専門・参照性」の因子は、選手がコーチの専門的な知識や技能を認識することと、コーチに対して同一化の意図を持つことによって生じる勢力であり、この勢力基盤に基づくコーチの勢力は専門・参照勢力と命名される。次に、「罰の脅威」

の因子は、選手がコーチからの罰を予期したり、コーチへの畏怖を感じることから生じる勢力であり、罰勢力と呼ばれる。第3に、「利益への期待」の因子は、コーチの指示に従うことが競技力向上など選手自身の利益につながることへの期待によって生じる勢力であり、利益勢力と命名される。第4に、「指導意欲」の因子は、選手がコーチの熱意や積極的な指導態度を認知することに基づく勢力であり、指導意欲勢力と呼ばれる。第5に、「正当性」の因子は、コーチが選手を指導する正当な権利を持ち、コーチの指導に従うことを当然とする内在化された規範から生じる勢力であり、正当勢力と命名される。最後に、「親近・受容性」の因子は、選手がコーチとの心理的距離を短く感じたり、自分を受け入れてもらえるという認知に基づく勢力であり、親近・受容勢力と呼ばれる。このうち、利益勢力と指導意欲勢力は、教師の勢力を検討した田崎（1979）あるいは親子関係における親の勢力を検討した今井（1986）の研究では見出だされておらず、スポーツ指導者特有の勢力と考えられた。

以上の研究結果からも明らかのように、何が勢力の基盤となるかは社会的な場面や集団の状況、あるいは被影響者の特性などによって異なることが示唆される。また、コーチが保持する社会的勢力は、その種類によって機能、あるいは効果が異なることも明らかにされている。たとえば、前述した森他（1990）の研究によれば、抽出された6つの勢力基盤に基づく社会的勢力のうち、選手がコーチの社会的勢力の基礎に利益、指導意欲、専門・参照勢力を認知する場合は、コーチに対する満足感やコーチからの被影響感が高いのに対して、罰勢力を認知する場合は、低い傾向があるとする。すなわち、コーチがどのような種類の社会的勢力を行使しているかが、選手のコーチからの影響の受容の程度を規定し、最終的に指導の

*島根大学教育学部保健体育研究室

効果を規定する重要な要因であることが示唆されるのである。

ところで、現実の指導場面では、コーチはさまざまな行動を通して選手に影響を及ぼしている。この場合、コーチの行うさまざまな行動、すなわちリーダーシップは勢力の具体的な行使であり、選手は、コーチが意識するしないにかかわらず、それらの行動を何らかの勢力に基礎を置いた行動として受け止めていると考えられる。したがって、コーチのどのような行動がどのような種類の勢力に基礎を置く行動として選手に受け止められているかを検討することは、コーチが自分の行動を診断したり、効果的な指導を行う上で有益な示唆を与えられられる。

このような観点から、伊藤・豊田・遠藤・森(1992)は、中学・高校の運動部員を対象に、コーチのどのようなリーダーシップ行動がどのような種類の勢力に基礎を置いた行動として受け止められているかを検討した。まず、リーダーの行動としては、「練習と指示」、「民主的行動」、「専制的行動」、「社会的支援」、「正のフィードバック」の5つが採用された(Chelladurai & Saleh, 1980)。また、社会的勢力としては、森他(1990)によるコーチの勢力基盤に関する研究結果を参考に、利益、親近・受容、指導意欲、専門、参照、罰、正当の7つが用いられた。その結果、「練習と指示」-利益勢力、「専制的行動」-罰勢力という関係が強いことが明らかにされている。これは、競技成績を高めるための技術や作戦に関わる行動は利益勢力に、部員の意思を無視した意思決定や個人的権威を強調する行動は罰勢力に、それぞれ基礎を置いた行動と認知されやすいことを示している。また、男子においては、「社会的支援」と親近・受容、指導意欲、参照の各勢力が、女子においては、「民主的行動」と指導意欲および参照勢力がそれぞれ強く関連しているという性差が認められることも明らかにしている。

一方、三隅(1984, Pp. 416-419)は、企業組織体における上司のPM式リーダーシップ行動類型と社会的勢力との関係を検討し、PM型-専門勢力、P型-報酬、強制(罰)勢力、M型-準拠(参照)勢力、pm型-正当勢力という関連がそれぞれ強いことを明らかにしている。また、小学生を対象に、教師のPM式リーダーシップ行動類型と勢力基盤との関係について検討した田崎(1981)によれば、PM型リーダーシップ行動に対して正当性・熟練性・親近性の勢力基盤が、P型リーダーシップ行動に対しては、罰の勢力基盤のみがそれぞれ強く付与されたのに対して、M型およびpm型とは明確な関

係が認められなかったことを報告している。なお、ここで採用されているリーダーシップPM論では、リーダーシップ行動を、集団の目標達成ないし課題解決へ志向した行動(P行動)と集団内の人間関係を調整し円滑にする行動(M行動)の両面からとらえ、P行動が強くM行動が弱いリーダーをP型、P行動が弱くM行動が強いリーダーをM型、P・M行動の両方を兼ね備えているリーダーをPM型、両方も欠如しているリーダーはpm型、と4つに類型化する。

さて、伊藤他(1992)によって明らかにされた「専制的行動」と罰勢力の関係は、三隅(1984, Pp. 416-419)と田崎(1981)のP型リーダーシップ行動と罰との関連性と共通するものであるが、両者のリーダーシップ行動の取扱いには違いがあり、単純に比較するには注意が必要である。なぜなら、前者が各リーダーシップ行動を独立したものとして扱い社会的勢力との関係を検討しているのに対して、後者では、リーダー(上司、あるいは教師)のPM行動類型との関係を検討しているからである。スポーツ指導場面における現実のコーチは特定の行動を個別にとっているのではないことを考えると、コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との関連を検討する場合、コーチのリーダーシップ行動類型との関連を検討することも重要であり、スポーツの指導方法をさらに研究する上で有益な情報が得られるものと考えられる。したがって、本研究では、部活動の指導方法の研究の一環として、コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との関係を再検討するために、コーチのリーダーシップ行動類型と社会的勢力との関係を明らかにすることを目的とする。

そこで、本研究では、コーチのリーダーシップ行動をPM論の立場からとらえることにする。それは、①P機能とM機能があらゆる集団のリーダーシップの基本的機能であることが明らかにされている(三隅, 1984)、②わが国のスポーツ集団の研究において最も広く用いられ、スポーツ集団におけるリーダーシップを考える上で有効であることが示されてきている(たとえば、丹羽, 1978: 丹羽・岡・黒田・蔦川・林, 1992; 種村・黒田・長沢・丹羽, 1991)、③集団をリーダーシップの観点から類型化することが容易である、ことなどによる。

なお、本研究では、伊藤他(1992)の分析にならない、P・Mリーダーシップ行動を構成する各下位行動との関係も検討してみたい。このような分析を通して、コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との関係がより明確になると考えられるからである。

方 法

調査対象

S県およびY県内の私立・公立の中学校と高等学校のバレーボール部36チームで、部員の総数は、中学生316名(男子149名, 女子167名), 高校生301名(男子136名, 女子165名)の計617名であった。なお, コーチの性別はすべて男性である。

測定尺度

1. リーダーシップ測定尺度の作成 松原(1989)と坂西(1989)が運動部の教師を対象に実施したPM式リーダーシップ測定尺度などを参考に作成した。尺度は, 5段階評定尺度である(具体的な項目内容は, Table 1を参照)。

2. コーチの社会的勢力測定尺度の作成 森他(1990)が運動部の指導者を対象に行った社会的勢力の基盤に関する因子分析結果に基づいて作成した尺度を, 伊藤他(1992)が若干字句などを修正した尺度を用いた。具体的には, 「監督の指導で, 技術や記録が向上することが多い(利益)」, 「監督は, 私のことをよく理解してくれる(親近・受容)」, 「監督は, 熱意を持って私に接してくれる(指導意欲)」, 「監督は, この競技(種目)のことをよく知っている(専門)」, 「監督は, 私のよいお手本である(参照)」, 「監督に逆らうと, あ

とあと面倒なことが多い(罰)」, および「選手である私は, 監督の指示に従うべきである(正当)」などの7勢力であり, それぞれ4項目の計28項目からなる。調査対象者には, 「あなたの監督に対する気持ち」として, あてはまる程度を「6.よくあてはまる」から「1.まったくあてはまらない」までの6段階で評定することを求めた。

また, 本研究では分析の対象にはしなかったが, 運動部活動における適応感や達成動機などの評定尺度も含まれていた。

調査時期と方法

1989年10月から12月にかけて, 上記の2つの測定尺度が各運動部の顧問教師によって運動部ごとの集団で実施された。

結果と考察

リーダーシップ機能測定項目の因子分析

本研究で用いたPおよびM機能測定項目の妥当性を検討するために, 因子分析(主成分法・バリマックス回転)を行った。固有値1以上で因子数を決定し, 回転後の因子負荷量が.40以上の項目をそれぞれの因子を代表する項目とした採用した(Table 1)。

第1因子には, 「部員の個人的な悩みの相談にのって

Table 1 リーダーシップ測定項目と回転後の因子負荷

リーダーシップ測定項目	因子				h ²
	I	II	III	IV	
20 部員の個人的な悩みの相談にのってくれる	.79	-.17	.05	.00	.65
16 個人的なことでも, 親身になって世話をやいてくれる	.73	-.22	.07	.02	.44
15 部員の意見を聞こうとする	.67	-.15	-.07	.25	.48
3 部員の間でもめごとがあったりすると進んでまとめようとする	.63	-.30	.16	.00	.52
7 部員を信頼している	.59	-.36	-.10	.07	.50
18 試合や練習で失敗しても, かばってくれる	.58	.14	-.20	.36	.52
4 部のことで気軽に話をするができる	.57	-.04	-.06	.33	.44
5 皆の練習ぶりをみて, 一生懸命やるように励ましてくれる	.56	-.32	-.05	.33	.53
22 部になじめない人がいると, 部にとけこませようとする	.49	-.43	.14	.08	.45
2 新入部員に対し練習の内容ややり方をうまく教える	.35	-.73	.08	.13	.69
12 監督の計画・手順がまずいために練習時間がむだになるようなことがある	-.13	.70	.23	.18	.60
21 皆が正しいやり方で練習しているか気を配る	.28	-.60	.27	.24	.57
17 練習の仕方や「こつ」を教えてくれる	.38	-.57	.01	.23	.53
11 練習について批評し, 指示や命令を与える	-.16	-.55	.37	.32	.57
9 各部員が最大限の力で練習しているか気を配る	.32	-.41	.27	.31	.44
1 部員に対して規則に従うことをやかましくいう	-.02	-.04	.72	-.18	.56
6 部員に対して練習量のことをやかましくいう	-.03	.06	.69	-.06	.48
8 練習をなまけているようにみえると, 注意したり小言をいう	.16	-.12	.63	-.09	.48
19 練習を無断で欠席したり遅刻したりすると注意する	-.02	-.05	.63	.27	.45
14 よいプレーをしたときには, ほめてくれる	.35	-.11	-.12	.63	.55
10 試合や練習で失敗したとき, 部員自身を責めるのではなく技術面で注意を与える	.17	-.34	-.09	.55	.45
13 部活の成績が上がることを重視している	-.00	-.12	.38	.43	.35
寄与率(%)	29.2	11.5	6.0	5.2	52.0

くれる」, 「部員の間でもめごとがあったりすると進んでまとめようとする」, 「部員の意見を聞こうとする」などの項目が含まれ, チーム内の円滑な運営に関する機能と考えられることから, 「親和的調整」の因子と呼ぶことにする。第2因子には, 「新入部員に対し練習の内容ややり方をうまく教える」, 「皆が正しいやり方で練習しているか気を配る」など, 練習の仕方や技術の指導に関する内容が含まれていることから, 「技術的指導」の因子と命名する。第3因子は, 「部員に対して規則に従うことをやかましくいう」, 「練習をなまけているようにみえると, 注意したり小言をいう」など, 管理に関わる内容であることから, 「管理」の因子と命名した。第4因子には, 「よいプレーをしたときにはほめてくれる」, 「試合や練習で失敗したとき, 部員自身を責めるのではなく技術面で注意を与える」などの項目が含まれ, 選手に対する配慮を内容とすることから「配慮」の因子と命名する。

以上の各因子の内容をみると, 第2因子と第3因子がP機能に対応し, 第1因子と第4因子がM機能に対応していると考えられる。したがって, P機能は2因子(10項目), M機能は2因子(12項目)からなるものとする。

リーダーシップ行動類型と社会的勢力の関係

各チームを指導するコーチのリーダーシップの特徴と当該チームに所属する選手が認知するコーチの社会的勢力との関連をみるために, 36チームの中から, 典型的なリーダーシップ行動をとっているコーチを抽出する必要がある。そこで, 坂西(1989)の手順にしたがって, 以下のように分析した。まず, 各チームを選手の評定に基づいて, P機能・M機能の相対的な強さによって類型化した。両機能の相対的な強さを決めるための基準値は, 全被験者を対象に算出したP機能・M機能それぞれの項目の合計得点(P機能, 10項目; M機能, 12項目)の平均($P = 35.9$; $M = 38.4$)とした。そして, あるチームのP機能・M機能の平均得点が基準値よりも高ければ大文字のP・Mと表示し, 基準値よりも低ければ小文字のp・mと表示することにした。このように, PM類型(9チーム)・Pm類型(7チーム)・pm類型(8チーム)・pM類型(12チーム)の4つにチームを類型化した。

さらに, 以下の基準で, 先に類型化したチームの中からそれぞれ最も典型的なチームを3~4個ずつ選び出し, 分析の対象とした。まず, PM類型のチームについては, チームのP機能得点とM機能得点をそれぞれ大きい順に順位づけし, 両者の順位の合計値の小さいチームから3

つを抽出した(65名; 以下, PM型とする)。Pm類型のチームについては, P機能得点は大きい順, M機能得点は小さい順に順位づけし, 両者の順位の合計値の小さいチームから3つを抽出した(62名; 以下, P型とする)。pM類型のチームについては, P機能得点は小さい順, M機能得点は大きい順に順位づけし, 両者の順位の合計値の小さいチームから3つを抽出した(32名; 以下, M型とする)。pm類型のチームについては, P機能得点とM機能得点をそれぞれ小さい順に順位づけし, 両者の順位の合計値の小さいチームから4つを抽出した(41名; 以下, pm型とする)。

こうして抽出された4種類の典型的なリーダーシップ行動をとるコーチに対して, それぞれのチームに所属している選手がどのような社会的勢力を認知しているのかを明らかにするために, まず, 4類型について各社会的勢力ごとにそのチームの選手の勢力得点の平均値と標準偏差を算出した。次に, 一要因分散分析の結果, すべての社会的勢力において類型の効果が1%水準で有意であったので, 多重比較(Ryan法による)を行った。Table 2には, これらの結果が, また, Fig. 1には, 類型別の平均値が図示されている。

各社会的勢力における類型別平均値の相対的な順位を示すと以下ようになる。

利益: $PM > P \geq M > pm$
 親近・受容: $PM \geq M > P > pm$
 指 欲: $PM > M \geq P > pm$
 専 門: $PM \geq P > M > pm$
 参 照: $PM > M \geq P > pm$
 罰 : $P > M$
 正 当: $PM \geq P \geq M > pm$

これらの順位を社会的勢力間で比較すると, まず, 利益・指導意欲・参照の各勢力では, PM型リーダーが最も高い得点を, pm型リーダーが最も低い得点を示し, P型リーダーとM型リーダーが, それらのほぼ中間に位置するという点で共通している。リーダーシップの欠如を意味するpm型において, これら社会的勢力が低く評定されるのは当然のことと考えられるが, P行動・M行動それぞれ単独のリーダーよりも両者を兼ね備えたPM型リーダーの得点が高いことは重要である。PM型リーダーとは, 競技力向上を重視すると同時に, チーム内の人間関係や個々の選手に対する配慮も重視するコーチである。したがって選手は, PM行動が揃ったときに初めて, その基礎として選手にとってポジティブな勢力である利益・指導意欲・参照の各勢力を高く評定しているのである。

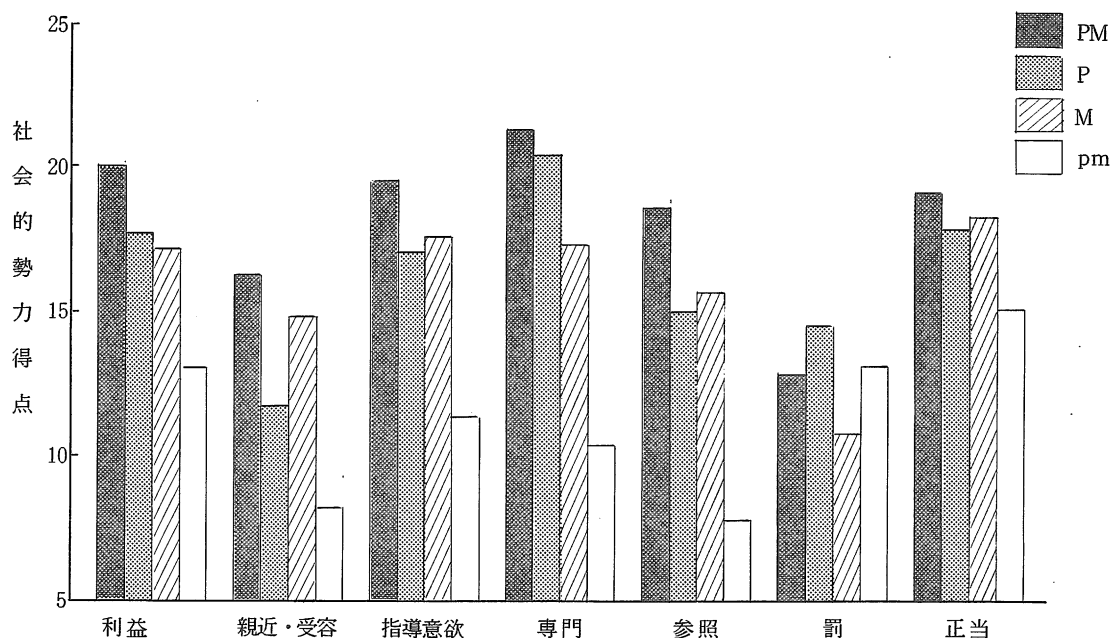
Table 2 社会的勢力得点の類型別平均値の比較（上段は平均，下段は標準偏差）

類 型	PM (n=65)	P (n=62)	M (n=32)	pm (n=41)	F 値
利 益	20.1 ^a 3.30	17.7 ^b 3.06	17.2 ^b 3.41	13.0 ^c 3.38	39.11**
親 近・受 容	16.3 ^a 3.39	11.7 ^b 3.20	14.8 ^a 3.87	8.2 ^c 4.11	42.60**
指 導 意 欲	19.5 ^a 3.00	17.0 ^b 3.28	17.6 ^b 3.25	11.4 ^c 2.63	58.99**
専 門	21.4 ^a 2.70	20.5 ^a 2.78	17.4 ^b 4.46	10.4 ^c 3.46	41.03**
参 照	18.6 ^a 3.38	15.0 ^b 3.01	15.7 ^b 4.01	7.8 ^c 3.41	84.33**
罰	12.9 3.27	14.6 ^a 3.80	10.8 ^b 3.08	13.1 5.94	6.06**
正 当	19.2 ^a 3.47	17.9 ^a 3.41	18.3 ^a 2.70	15.1 ^b 4.40	11.34**

** p<0.01

注) a, b, cの記号が異なるグループ間には、多重比較においてp<.05で有意差があることを示す。

Fig 1 PM, P, M, pm 型リーダーに対する各社会的勢力得点の比較



親近・受容勢力では、PM型とM型リーダーが高く、P型リーダーがこれに次ぎ、pm型リーダーが最も低い。すなわち、選手はPM型とM型リーダーの行動の基礎として、親近・受容勢力を高く評定しているのである。ここで、PM型とM型リーダーは、ともにチーム内の人間

関係や個々の選手に対する配慮を重視するコーチであることが共通していることから、リーダーシップ行動のうちM行動が親近・受容勢力に基礎を置く行動として受け止められやすいことが示唆される。

専門勢力では、PM型とP型リーダーが高く、M型リ

ーダーがこれに次ぎ、pm型リーダーが最も低いという順位であった。これは、PM型とP型のリーダーシップ行動の基礎に専門勢力があることを示唆している。しかしながら、PM型とP型リーダーには、チームの目標達成を志向するという点で共通性があることから、P行動と専門勢力との関連が強いのではないかと考えられる。

正当勢力では、PM型・P型・M型リーダーがpm型リーダーよりも高い。pm型リーダーシップとは、リーダーシップそのものの欠如であり、他の類型がPM両方あるいはそのいずれかの行動をとっているという点で異なる。したがって、行動類型との関係は明確ではないが、少なくとも何らかのリーダーシップ行動をコーチがとらなければ、選手はコーチの指導を正当なものとは認めないのであろう。

最後に罰勢力では、P型リーダーとM型リーダーの間にも有意差が認められ、PM型・pm型リーダーがその中間に位置している。P型リーダーシップ行動とは、チームの目標達成のみを重視する行動であり、技術的指導によって練習を促進したり、選手の練習を管理したりする行動が含まれている。したがって、これらのP型リーダーシップ行動には、当然のことながら強制的、圧力的側面が含まれており、そのことが、P型リーダーの勢力として罰が高く評定されるのであろう。このことは、P型リーダーと対照的なM型リーダーに対する罰勢力が最も低かったことからもうなずけよう。

以上の結果を、リーダーシップ行動類型別の観点からまとめると、以下ようになる。まず、PM型リーダーシップ行動の基礎には、利益、指導意欲、参照など選手にとってポジティブな勢力が、M型リーダーシップ行動の基礎には、親近・受容勢力がそれぞれある。また、P型リーダーシップ行動の基礎には、選手にとってポジティブな専門勢力とネガティブな罰勢力の両方がある。さらに、pm型リーダーシップ行動は社会的勢力との関連が認められない。

リーダーシップ下位行動と社会的勢力の関係

前項では、リーダーシップ行動類型と社会的勢力との関連を検討した。ここでは、リーダーシップP行動・M行動を構成する各下位行動（P行動；技術的指導、管理；M行動；親和的調整、配慮）を取り上げ、社会的勢力との関係を検討することにする。Table 3は、全被験者（617名）を対象に、リーダーシップ下位行動と各社会的勢力との偏相関を求めたものである。

これによると、P行動のうち「技術的指導」行動は、罰勢力を除くすべての勢力と1%水準で有意な係数が認められ、なかでも専門、利益、参照、指導意欲の各勢力との係数は大きいものであった。このことは、「技術的指導」行動の基礎として、専門、利益、参照、指導意欲の各勢力が認知されやすいことを示唆している。「技術的指導」行動とは、Table 1より、練習の方法や内容に関わる行動であり、部活動の主たる目的である競技力向上に最も寄与する行動であろう。したがって、そのことが「技術的指導」行動の基礎に選手にとってポジティブな多くの勢力を認知させる理由と考えられるのである。

P行動を構成するもう1つの「管理」行動は、罰勢力と正当勢力とは正の、親近・受容勢力と参照勢力とは負のそれぞれ有意な係数が認められた。これは、選手を管理する行動の基礎としてコーチの罰勢力の認知を高め、親近・受容性や参照性の認知を低減させることを示している。「管理」行動とは、部の規則に反する行動を叱責したり、練習を促進させるための行動であり、選手にとっては圧力として機能すると思われる。このような側面が、罰勢力の認知を強めると同時に親近・受容勢力や参照勢力の認知を弱める理由と考えられる。

一方、M行動のうち、「親和的調整」行動は、罰および正当勢力を除く5つの勢力との間に有意な正の係数が認められ、とりわけ親近・受容勢力と参照勢力との関係が強い。また、罰勢力との間には、有意な負の係数が認められた。「親和的調整」行動とは、チーム内の人間関

Table 3. リーダーシップ行動の各因子と勢力の偏相関係数 (n = 617)

リーダーシップ行動	社 会 的 勢 力						
	利 益	親 近・受 容	指 導 意 欲	専 門	参 照	罰	正 当
親和的調整 (M)	.154**	.504**	.235**	.151**	.415**	-.202**	.062
技術的指導 (P)	.527**	.335**	.496**	.528**	.518**	.046	.258**
管 理 (P)	.001	-.148**	.053	-.052	-.104**	.343**	.112**
配 慮 (M)	.144**	.022	.019	.031	.002	-.030	.184**

** p < .01

係を調整したり、コーチと選手との良好な人間関係を維持・発展させようとする行動であり、このような行動の基礎として選手は親近・受容や参照勢力といったコーチとの人間関係に基づく勢力を受け止めているのである。また、それと同時に、この行動はネガティブな勢力である罰勢力の認知を低減させるのであろう。

最後に、「配慮」行動は、社会的勢力との関連が最も弱く、わずかに利益、正当勢力との間に低い係数が示されたのみであった。

次に、以上の結果を前項の類型別の結果と比較しておくことにする。このような検討を通して、コーチのどのような行動がどのような勢力と関連しているかがより明確になると考えられるからである。

そこで、最初に、前項の分析においてPM型リーダーシップ行動との関連が強かった利益、指導意欲、参照の3つの勢力からみてみよう。まず、利益勢力では、P行動の下位行動において顕著な違いがみられる。すなわち、一方の「技術的指導」行動は最も高い係数を示しているのに対して、もう一方の「管理」行動との関係は認められないのである。したがって、M行動が行われていることが前提とはなるが、選手はコーチが行うP行動の中でも「技術的指導」に対してより利益勢力を認知することを示唆している。また、指導意欲勢力では、「親和的調整」と「技術的指導」には有意な係数が認められたが、「管理」および「配慮」行動には有意な関係が認められない。したがって、選手は技術的な指導と親和的調整を十分に行うコーチに対して、指導意欲を認知するといえる。さらに、参照勢力では、「親和的調整」と「技術的指導」には有意な係数が認められたが、「管理」行動には有意な負の係数が認められた。したがって、技術的な

指導と親和的調整を十分に行うものの、管理的行動はとらないようなコーチの行動の基礎に、参照勢力があることが示唆される。

次に、P型リーダーシップ行動類型との関係が強かった勢力についてみると、まず罰勢力では、「管理」との間には正の、「親和的調整」との間には負のそれぞれ有意な係数が認められた。このことは、P行動の中でも管理的な行動をとり、調和的調整行動をとらないコーチに対して罰勢力が強く認知されることを示していると考えられる。また、専門勢力では、「親和的調整」と「技術的指導」に有意な係数が認められた。これは、選手がコーチの行動に対して専門勢力を認知する場合、P行動、とりわけ「技術的指導」行動が重要となるが、「親和的調整」行動が伴っていることが前提となることを示唆している。

さらに、M型リーダーシップ行動類型との関係が強かった親近・受容勢力では、「親和的調整」との間に最も高い係数が示されたが、「技術的指導」との間に正の、「管理」との間には負の、それぞれ有意な係数も示されていた。これは、親近・受容勢力の認知の背景として、「親和的調整」行動が最も重要であるが、技術的な指導を行い、管理的な行動を行わないことも重要であることを示している。

最後に、PM型リーダーシップ行動類型との明確な関連が認められなかった正当勢力では、「技術的指導」、「管理」、「配慮」との間に弱い関連が認められる。これは、選手がコーチからの影響を正当なものとして認知する背景に、「技術的指導」や「配慮」行動だけでなく管理的行動も含まれることを示しているが、それらの関係が弱いことが行動類型との間に明確な関連が認められな

Table 4. リーダーシップ行動の各因子と利益勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=149)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	.328**	.181*	.102	.001
技術的指導(P)	.382**	.455**	.592**	.548**
管 理(P)	-.018	.093	-.095	.040
配 慮(M)	.057	.261**	.076	.220**

偏相関係数の有意性検定：*p<.05, **p<.01
 偏相関係数の有意差検定：----a p<.05, ——b p<.01
 以下の表はこれと同じ

Table 5. リーダーシップ行動の各因子と親近・受容勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=149)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	.470**	.484**	.458**	.510**
技術的指導(P)	.303**	.291**	.377**	.362**
管 理(P)	-.162	.160*	-.294**	-.226**
配 慮(M)	-.021	.108	-.050	-.005

Table 6. リーダーシップ行動の各因子と指導意欲勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=149)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	.264 **	.381 **	.302 **	.167 *
技術的指導(P)	.306 **	.301 **	.642 **	.558 **
管 理(P)	-.102	.268 **	-.089	.015
配 慮(M)	.015	.137	-.074	-.082

Table 8. リーダーシップ行動の各因子と参照勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=146)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	.538 **	.505 **	.347 **	.233 **
技術的指導(P)	.320 **	.483 **	.578 **	.601 **
管 理(P)	-.166 *	.293 **	-.280 **	-.146
配 慮(M)	-.114	.077	.027	-.032

Table 10. リーダーシップ行動の各因子と正当勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=149)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	.189 *	.144	-.001	-.027
技術的指導(P)	.239 **	.135 *	.355 **	.241 **
管 理(P)	.110	.164 *	.033	.127
配 慮(M)	.016	.348 *	.100	.296 **

Table 7. リーダーシップ行動の各因子と専門勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=149)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	.305 **	.183 *	.062	-.101
技術的指導(P)	.343 **	.564 **	.561 **	.624 **
管 理(P)	-.145	.195 *	-.117	.048
配 慮(M)	-.048	.030	.221 *	-.028

Table 9. リーダーシップ行動の各因子と罰勢力の偏相関係数

リーダーシップ行動	中 学		高 校	
	男子(n=149)	女子(n=167)	男子(n=136)	女子(n=165)
親和的調整(M)	-.142	-.235 **	-.190 *	-.224 **
技術的指導(P)	.089	.138	.042	.001
管 理(P)	.344 **	.332 **	.233 **	.403 **
配 慮(M)	-.044	-.146	.010	.146

った理由であろう。

ところで、先の研究(伊藤他, 1992)で、コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との関係に発達年代や性による違いが認められていることから、本研究においてもこれらの影響を探索的に検討しておくことにする。

Table 4からTable 10は、中学生・高校生のそれぞれについて、男女別にリーダーシップ行動と勢力との偏相関を求めたものである。

まず、Table 5とTable 9より、「親和的調整」と親近・受容勢力および「管理」と罰勢力との関係は、4群ともに有意であり、しかも4群間の偏相関係数に差が認められない。このことは、「親和的調整」と親近・受容勢力および「管理」と罰勢力との関係が発達年代や性を問わず共通して認められることを示していることから、これらの関連がかなり強いと考えられる。

それに対して、「技術的指導」および「親和的調整」と利益、指導意欲、専門、参照の各勢力との間には、発達年代によってかなりの違いが認められる点が興味深い（それぞれ、Table 4, Table 6, Table 7, Table 8を参照）。まず、「技術的指導」との関係に注目すると、「技術的指導」との関係は中学生よりも高校生のほうが強い傾向が認められる。これら4つの勢力は、選手にとってポジティブな勢力である点で共通することを考えると、コーチの「技術的指導」行動の基礎として、高校生のほうが中学生よりもポジティブな勢力を認知しやすいことをこの結果は示していると思われる。高校の選手は、すでに中学で運動部を経験しているものが多く、技術や記録向上の意欲は高く、運動部に積極的に関与しているものと思われる。したがって、自らの目標に合致するコーチの「技術的指導」行動の影響をより強く受けるのであろう。

それに対して、「親和的調整」では、逆に、高校生よりも中学生のほうが高い傾向が認められる。つまり、選手がコーチの「親和的調整」行動の基礎としてポジティブな勢力を認知する程度は、中学生のほうが強いのである。部活動は中学生になって初めて参加することが多く、部活動への関与の程度も不安定であらう。したがって、このような状況にある中学生は、選手との人間関係を重視するコーチの「親和的調整」行動の基礎にポジティブな勢力を認知するのであろう。

なお、中学女子では、管理行動と親近・受容、指導意欲、専門、参照の各勢力との関連において他の3群とやや異なる関係が認められる。たとえば、Table 8より、中学女子は管理行動の基礎として参照勢力を認知するのに対して、他の3群はコーチの管理的行動に対して参照勢力の認知を低減させる方向で関連しているのである。このような関係は高校女子では認められないことから、中学女子の勢力認知における特徴の一面を示すものかもしれない。しかし、本研究で対象としたコーチの個人差、もしくは選手の特性が反映している可能性も残されていることから、今後、他の集団を対象にしてさらに検討が必要であらう。

さて、以上をまとめると本研究結果は、コーチの指導方法に対して、社会的勢力の観点から次のようなことを示唆している。コーチの影響力を高めるためには、P行動とM行動の両方を兼ね備えたりダーシップ行動をとることが必要であるが、とりわけ「技術的指導」と「親和的調整」を十分に行い、なおかつ「管理」行動を行わないことが効果的である。

引用文献

- 坂西友秀 1989 フォロワーのパーソナリティ特性の関数としてのリーダーシップ効果 教育心理学研究, 37, 107-116.
- Chelladurai, P. and Selen, S. H. 1980 Dimension of leader behavior in sport. *Journal of Sport Psychology*, 2, 34-45.
- 今井芳昭 1986 親子関係における社会的勢力の基盤 社会心理学研究, 1, 35-41.
- 伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎・森 恭 1992 コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力の認知との関係 スポーツ心理学研究, 19, 18-25.
- 松原敏浩 1989 部活動における教師のリーダーシップ行動とその規定要因の検討 大同工業大学紀要, 25, 5-28.
- 三隅二不二 1984 リーダーシップ行動の科学(改訂版) 有斐閣 Pp. 416-419.
- 森 恭・伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎 1990 コーチの社会的勢力の基盤と機能 体育学研究, 34, 305-316.
- 丹羽劭昭 1978 大学における運動部員の集団魅力の変化について スポーツ心理学研究, 4, 49-56.
- 丹羽劭昭・岡仁詩・黒田公子・蔦川譲・林昌一郎 1992 戦績での強さからみたラグビー部の権限構造と集団魅力 体育学研究, 37, 29-43.
- 種村紀代子・黒田公子・長沢邦子・丹羽劭昭 1991 運動部における権限構造とリーダーシップの関係(2) -戦績と技術指導・圧力・集団維持の各リーダーシップを中心に- 日体体育学会第42回大会発表資料
- 田崎敏昭 1979 児童・生徒による教師の勢力源泉の認知 実験社会心理学研究, 18, 129-138.
- 田崎敏昭 1981 教師のリーダーシップ行動類型と勢力の源泉 実験社会心理学研究, 20, 137-145.